



Title	Chiari pelvic osteotomy for osteoarthritis of the hip joint torn and detached acetabular labra and their influences on results -
Author(s)	仁科, 哲彦
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37547
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"＞ 大阪大学の博士論文について ＜/a＞ をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 8 】

氏名・(本籍)	仁	科	哲	彦
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	9	2	3
学位授与の日付	平成	2	年	5
学位授与の要件	学位規則	第	5	条
学位論文題目	Chiari pelvic osteotomy for osteoarthritis of the hip joint torn and detached acetabular labra and their influences on results— (変形性股関節症に対する Chiari 骨盤骨切り術の術後成績— —臼蓋唇の異常の影響について—)			
論文審査委員	(主査)	教授	小野	啓郎
	(副査)	教授	小塚	隆弘
		教授	杉本	侃

論文内容の要旨

〔目的〕

先天性股関節脱臼の遺残変形である臼蓋形成不全に起因する変形性股関節症（以下股関節症）は股関節疾患のなかで大きな比重を占める。この股関節症に対する Chiari 骨盤骨切り術（以下 Chiari 手術）はすでに確立した治療方法の一つである。本術式の術後成績に影響を与える因子として、術前の股関節症の stage, 年齢, 骨切りの角度, 高さ, 移動量などが報告されている。しかし、一方で手術適応, 手技が充分基準を満たしているにもかかわらず、術後に疼痛を残す症例が存在する。この原因はいまだ明かでない。本研究では、その原因を明かにすることを目的として術前の関節造影所見でみられる臼蓋唇の異常に注目した。その結果、臼蓋唇の異常が術後成績に影響を与え、疼痛を遺残させることがわかったので報告する。

〔方法〕

1978年から1983年の6年間に臼蓋形成不全を原因とする二次性の股関節症に対して、当科において Chiari 手術を施行した症例は103例、110関節である。それらのうち①手術時の年齢が15才以上であること、②手術時、X線上初期股関節症であること、③術前に関節造影を施行していること、④2年以上経過を観察していること、以上の4点をみとす58例64関節を調査対象とした。男10例13関節、女48例51関節である。これら58例の手術時の年齢は平均27歳（15-47歳）、follow-up 期間は平均4年（2年-7年3カ月）であった。術前の関節造影所見より臼蓋唇像を3群に分類した。Normal type は損傷のないもの、tear type は臼蓋唇の起始部に造影剤の侵入があるが、この侵入は臼蓋唇を完全には横断しないもの、detached type はこの侵入が臼蓋唇を完全に横断し、臼蓋唇が臼蓋

縁よりあきらかに剥離していると考えられるものとそれぞれを定義した。3群の頻度は normal type が23関節(36%)、tear typeが21関節(33%)、detached typeが20関節(31%)であった。以上3群間における手術、手技には明らかな差がなかった。このことからこれら3群は comparable であると判断し、これら3群間における術後臨床成績およびX線経過の比較を行い、臼蓋唇の異常が術後成績に与える影響を調べた。臨床評価はMerle d'Aubigne hip score(18点満点)に従い、優(18-17)、良(16-15)、可(14-13)、不可(12-)の4段階で評価した。X線学的な股関節症の stage 判定はKellgrenの評価法による。

〔結果〕

調査対象全体の臨床成績の平均は術前14.3点から術後16.4点と改善していた。特に疼痛の評価点は3.6点から5.1点へと改善が著しかった。またX線学的に股関節症の進行が認められた症例は1例のみであった。しかし、術後成績の内訳は優39例(61%)、良14関節(22%)、可8関節(12%)、不可3関節(5%)と可以下の成績不良例が11関節(17%)存在した。これら11関節では疼痛の遺残が成績不良の原因となっていた。次に関節造影所見と術後成績の関連をみた。成績不良例の割合は normal type 群では0%、tear type 群では1関節(5%)、detached type 群では10関節(50%)と detached type 群で術後成績は有意に劣っていた($p < 0.001$)。このことから臼蓋唇の異常とくに detached type は Chiari 手術の術後成績を悪化させることがわかった。Detached type 群20関節中15関節(75%)において術前股関節部に疼痛を伴うclickが認められた。このclickは術後も10関節に遺残した。これら疼痛を伴うclickが遺残した10関節のうち5関節に対して術後2度目の関節造影を施行したところ断裂した臼蓋唇が骨頭と新臼蓋の間に嵌頓、圧挫された像がみられた。疼痛遺残例における特徴的な臨床症状はこのような臼蓋唇の嵌頓、圧挫が原因となって生じたものと考えられた。

〔総括〕

臼蓋唇の異常、とくに detachment が術前に認められる初期股関節症に対し Chiari 手術を施行した場合、成績不良例が50%にも達していた。このことは臼蓋唇の異常が Chiari 手術の手術成績の重要な予後因子であり、従来の Chiari 手術の適応を考え直す必要があることを示唆する。すなわち、臼蓋唇の異常が存在する場合は triple osteotomy (Steel 1973) double innominate osteotomy (Sutherland 1977) などの臼蓋縁が外側へ移動し、異常な臼蓋唇が荷重面から逃れるような術式が好ましいのかもしれない。また、異常な臼蓋唇の切除術の併用も今後検討されるべきであると考えている。今回の調査結果では detached type の症例を除いた場合、成績良好例が98%にも達していた。このことから、正しい適応症例を選べば Chiari 手術は確実性の高い治療法であるといえる。

論文審査の結果の要旨

変形性股関節症に対する治療は初期の症例であれば大腿骨または骨盤骨切り術が選択される。中でも Chiari 骨盤骨切り術はすぐれた治療成績が報告されており確立した治療方法の1つである。本術式の予後因子としては従来より手術手技的なものに重点が置かれてきた。本論文では単純レントゲン写真には判読不能な臼蓋唇の異常を関節造影を用いて描出し、この異常が重要な予後因子であることを明らかにした。このことから本術式の適応がより明確となり、変形性股関節症の手術治療成績の向上に寄与した。以上より本論文が学位授与に値すると判定した。